

December 2021



OBON SOCIETY

Newsletter

OBONソサエティに届けられるのご遺品も様々な物語を秘めています。私たちは、光栄にもお会いすることができた素晴らしい方々から寄せられた、驚くような物語を皆さんへお伝えして参ります。

マーク・シュルトン博士との会話は、まるで一世紀前の紳士と話しているようでした。彼はルイジアナの北部で生まれ育ち、医学校へ通うために家を出て開業医になって戻ってくると、すぐに昔の同級生たちの診察を始めました。また彼らの親たちや祖父母たちも。そして34年後の今も、彼らやその子供たち、孫たちを診察しています。儲けや名声には興味を示さず、何世代にも渡ってルイジアナの故郷の町で人々を診察することに満足しているのです。

「私はとても満ち足りています」彼は紳士的に言いました。

ルイジアナの話し方でゆっくりと。

「95歳まで働き続けたいですね」



マーク・シュルトン博士と妻ジェニファーと孫たち

彼は地域社会で診療をしながら、父親の晩年の面倒もみていました。父親の定期健診のある時、シュルトン博士は不意に父に感傷を誘う質問をしました。

「お父さん、ラルフおじさんが亡くなってから何年経った？」計算する間も置かず父は答えました。「75年だ」

「ラルフおじさん」は父の唯一の兄弟でした。二人は歳の差が数年ありましたがとても仲良しでした。魚釣りでもリス狩りでもバスケットボールでも二人はいつも一緒でした。地元の高校での試合で兄弟の貢献により優勝した時は、両親はさぞかし誇らしく思ったことでしょう。



シュルトン博士の父ジェームズと彼の狩猟犬たち



ラルフ・シュルトン(中央)ジェームズ・シュルトン(右下)と従兄弟たち

シュルトン博士の父とラルフは高校卒業後、従兄弟らと共に徴兵されました。ラルフは陸軍に配属され航空隊に入りました。バスケットコートでシュートを打っていた彼はB29爆撃機の尾部から敵を打つ兵士へと変貌を遂げたのです。1940年代の10代の若者は目まぐるしく成長しました。



ジョセフ・ラルフ・シュルトン



1942年4月16日の新聞記事の写真で、シュルトン博士の父(左端)は弟のラルフ(右から3番目)より背が低かったのが分かります。



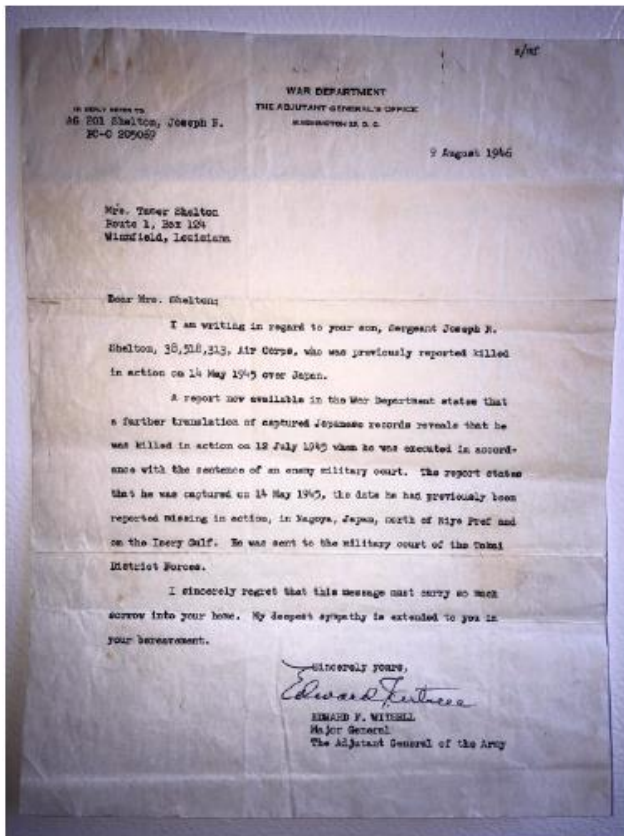


B29戦略爆撃機の乗組員たち。ラルフ・シェルトンは右から2番目

ほぼ全てのB29が、10,000~20,000ポンド(4.5~9t)の重さの焼夷弾を積載し何百もの爆撃を行いました。市中に火を放つことは、日本の武器や軍需品の生産を絶つ最も確実な方法だったのです。

60以上の日本の都市が攻撃目標とされました。これらの都市はアメリカのデトロイトやシアトル、ダラス、アトランタとほぼ同じ大きさで、鋼鉄、レンガ、セメント造りではなく木造建築の町がほとんどでした。古代からの木造都市は爆破され大炎上しました。何千もの焼夷弾は東西南北に散らばって落下し、人々は完全に逃げ場を失いました。

これが戦争なのです



家族の記録物の中からシェルトン博士により提供された手紙

B29は、世界一速く高く飛ぶ爆撃機でした。ラルフが入隊した頃には隊員たちの使命と戦略が変わりました。米軍は爆弾を火炎弾とともに爆発するものに置き換えたのです。この焼夷弾には、高引火性で衝撃時に発火する、ゼリー状にしたガソリンが含まれていたのです。

これが戦争です



焼夷弾を投下するB29爆撃機

日本の対空砲兵たちはこの襲撃から都市を守ろうと立ち向かいましたが、上空高く飛ぶB29には、ほとんど届きませんでした。けれども1945年5月14日、運悪くラルフの飛行機は被弾し墜落しました。米軍は彼の家族に、彼が戦死したと知らせました。

しかしながら、当時は米軍の知る所ではなかったのですが、ラルフと同乗の飛行兵達はパラシュートで脱出し無事に降り立ったのち、日本軍に捕縛され投獄されたのです。

飛行兵たちは裁判にかけられ、日本国に対する犯罪者として最終的に処刑されました。この階級の兵士に対する裁判と刑の執行が、当時の戦時中の日本で行われたとは想像できません。彼らの悲劇的な最後は戦後1年経ってから家族に届いた手紙(左の写真)によって明らかになりました。

これが、戦争なのです

ジェームズ・レオ・シェルトンは、弟を失った悲しみから立ち直ることが出来ませんでした。その深い心の傷は、彼が生きた最後の日まで癒されることはなかったのです。

ジェームズ・シェルトンは生前、日章旗を手に入れていました。この寄せ書き日の丸は、彼に戦争で戦った事や、弟の犠牲という悲劇の上に勝利があったことを思い起こさせた事でしょう。

彼が亡くなって数年後、この旗は息子のシェルトン博士が所有することになり、彼は父と全く同様に旗を大切に保管していました。



シェルトン博士がOBONソサエティへ送った寄せ書き日の丸



ある日シェルトン博士は、米国の公共TV放送PBSの人気番組「骨董品ロードショー」を見ていて、寄せ書き日の丸が展示されているのに気がきました。彼はすぐに物置へ行き、父の古い日章旗を探し出しました。

コンピューターで調べると、間もなくOBONソサエティを見つけました。彼は私たちの活動に共感してすぐに連絡をくれ、私たちが手順を説明すると担当者宛てに旗を送ってくれました。2019年6月のことです。その時からご遺族の搜索が始まりました。

OBONソサエティの搜索担当者たちは名前の他に書かれている文字を解読しました。彼らの並外れた読解力により、この旗の持ち主は、日本の北海道出身の新江繁規氏だと分かりました。



北海道は森林地帯や山岳地域の他に肥沃な農地を抱え、素晴らしい漁場に囲まれた島です。市町村はそれぞれ遠く離れて点在し、長い冬の間は深い雪で閉ざされます。



OBONソサエティの搜索者たちは、旗が日本の北部に位置する北海道に由来すると突き止めた。

たまたま北海道に住んでいるOBONソサエティのメンバーがこの搜索を進めました。それは非常に忍耐を要し時間のかかる作業でしたが、ついに旗の持ち主の妹さんを見つけ出しました。彼女はお兄さんの旗だと分かっただけでなく、出征していく兄を駅へ見送りに行ったことを鮮明に覚えていました。お兄さんは車窓から、両親のことを頼むと彼女に叫び、列車が動き出すと手を振ってくれたそうです。彼女は列車が見えなくなるまでお兄さんのはめた白手袋を見つめていたそうです。

OBONソサエティは2021年11月6日、北見市の老人いこいの家で執り行われた返還式を手伝いました。

93歳の中股さんと共に2人の妹さんたちも同席されました。4人目の妹さんはご病気で欠席されました。

彼女たちのお兄さんは、何百人もの北海道出身の若者たちと共に、ガダルカナル島へ送られました。戦後復員できたのは、わずか2割弱の兵士たちでした。



前列中央寄りに写る新江繁規さん



お兄さんの旗を受け取られる中股かず子さん

中俣さんは額装された大きな肖像画を持参されていました。それはお兄さんがガダルカナル島で戦没したのち、ご両親がプロに描いてもらったものでした。この肖像画のおかげで、彼の思い出は家族の中に70年以上も生き続けているのです。



出征した若者たちの8割以上を失った悲惨な歴史を記憶にとどめるため、慰霊碑が建立されました。



中股かず子さんは
「兄の痕跡は何も戻ってきませんでした。遺骨も何も一今こうして兄に再会しているような気がしています」と話されました。

彼女は旗に触れたとき、両手にのしかかるその重みに驚きました。これはきっと兄の魂が
「帰ってきたよ」と私に知らせてくれたのだと思う、と話してくれました。



(左から右へ) 工藤早苗さん、渡部規子さん、中股かず子さん

彼女は続けました。
「この旗を仏壇に大切に飾り兄を偲びます。兄の帰宅にご協力くださったすべての方々へ深く感謝いたします」

生涯を通して悲しみにさいなまれた彼女はこう明言しました。

「世界中から戦争が無くなってほしいです」

シェルトン博士は「旗の返還はとてもやりがいのあるものでした。心に区切りをつける事はとても大切です。この姉妹の方々は、75年の長きにわたり会えずにいたお兄さんの“生きた証”を受け取ったのです。私はただ、このご家族のためにお手伝いが出来た、ということがとてもうれしいです。」と言いました。



子供や孫たちに囲まれるマーク・シェルトン博士とジェニファー・シェルトン夫妻

シェルトン博士は30年以上ルイジアナの故郷の町で人々の治療にあたってきましたが、彼の思いやりあふれる博愛精神によって、今は、ここアメリカと地球の反対側にいる家族をも癒しているのです。

私たちは細心の注意と心配りをもって
ご遺族に寄り添っています。
私たちの活動は皆さまからの温かい
ご支援によって成り立っています。

この活動を続けるため、皆さまからのご寄付を
どうぞよろしくお願いいたします。



OBONソサエティ

<https://obonsociety.org/jpn>